見えないものが見えるように

今日から９月のスタート。
2023 年も残すところ４カ月になりました。
まだまだ残暑は厳しいですが、朝晩はひんやりとした風が吹くことも増えて、秋の到来を徐々に感じる時期になりました。
秋は、読書の秋、芸術の秋、スポーツの秋とも呼ばれます。
気温が下がってきて過ごしやすくなってきた季節は、様々な意欲が掻き立てられる時期でもあるのでしょう。
最近は、習い事の発表会や試合の応援などに誘われることも増えてきました。
実りの秋とも呼ばれるように、これまで積み重ねてきた努力の成果を発揮する催しが増えるのもこの時期の特徴のように思います。

さて、札幌で勤めていた頃の学校には「ブラスバンド」がありました。
私は何度も演奏の応援に行きましたし、時にレッスンをすることもありました。
そのブラスバンドは、何度もコンクールの東日本大会で優勝し、文部科学大臣賞を受賞するほどの成績を収めました。
いわば、東の覇者です。
この話には続きがあって、札幌の前に勤めていた奈良県の学校には「オーケストラ」がありました。
そこで私は弦楽器全体の指導をしており、個人レッスンや part 指導など放課後は結構あわただしく過ごしていました。

　そのオーケストラは、何度もコンクールの西日本大会で優勝し、文部科学大臣賞を受賞するほどの成績を収めました。
　いわば、西の覇者です。
　ちなみにこの奈良から札幌への転勤は、意図的に学校を選んだわけではありません。
　全くの偶然で、私は西の覇者の学校から東の覇者への学校へと移ったわけです。
　ちなみに、オーケストラ時代の教え子からは、現在プロの演奏家として活躍している子たちも結構数いて、つい先日も
「NHK 交響楽団に正式に入団しました！」
とかつての教え子から連絡が来ました。
　小学校では「クラブ活動」というイメージは余り湧かないかもしれませんが、私は奇しくもそうした全国レベルのクラブ活動で指導に携わる経験をさせてもらってきたということです。

　尚、西の覇者と東の覇者の練習には、細かい違いはあれど、大きな柱となる共通点が存在しました。
　小学生だからコーチや先生方がつきっきりで指導しているかと思いきや、そうではありません。
　日々の練習では、基本的に上級生が下級生に教えているのです。
　「もう少し楽器を上げてね。」
　「ここの音程に気をつけてね。」
　上級生が、自分の経験をもとに熱心に指導しています。
　下級生は習いたてですから、自分の演奏のどこを直せばよいのか、またどうすれば上手に引けるのか、当然分かりません。
　が、上級生には全部ではないにしろ、それが見えており、かつ分かっているようです。
　「上達」とはつまり、今まで見えなかったことが見えるようになったり、分からなかったことが分かるようになったりすることだといえます。

　勉強にも同じことが言えます。
　物語や詩を読む時も、解釈の仕方を何も教わっていない状態では、見えないものだらけで終わってしまいます。
「面白かった。」

「つまらなかった。」
などの平べったい感想で終わることも少なくありません。
　ですが、解釈の仕方を学んでいくと、今まで見えなかったようなものが見えるようになってきます。
　解釈の「ものさし」は、もちろん１つではありません。
　主役・対役、話者、視点、言葉や色のイメージ、対比、主題、他にも細かく分ければ数多くあります。
　今、国語の時間を使って、こうしたものさしや技のレパートリーを学んでいるところです。
　子どもたちの熱中具合は、すさまじいです。
　チャイムが鳴っても、スナックタイムが始まっても尚、国語の学習の続きで討論を行って至ります。
　しかも、教室の至る所で。
　中には、
　「お母さんにも聞いてみよ！」
　「あとで昼休みに別の先生とも討論してみよ！」
とクラスの外にその議論の場を写して試してみようというツワモノたちもいるほどです。
　それはひとえに「ものさし」や「技」を体得したからにほかなりません。
　今までは見えなかった世界が見えたり、知らなかった技が知れたことによって、それを使ったり試したくなったりしているのです。
　現在、「忘れもの」という高田敏子さんの詩で討論を行っているのですが、３ 時間びっちり討論して尚、子どもたちは「まだまだやりたい！」と言います。
　その熱量には、教えているこちらが驚くほどです。
　高まってきた学びの熱を冷ますことのないように、子どもたちのチャレンジを温かく見守りたいと思います。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit